平和のお手伝い

　20XX 年ー太平洋戦争の語り部高齢化が叫ばれる中、政府は憲法改正に成功、「日本は過去に囚われない」というキャッチフレーズを主軸に戦争をしていく準備をする。反対運動を押し込め、語り部のほとんどが亡くなったタイミングを見計らい、戦争への肯定的な意見を発表。各国の批判を浴びる中、方向転換をすることはなく時は過ぎた。数百年後、日本も全面的に参加する世界大戦が勃発。アメリカとの安保条約の下勝利をおさめたが、国土への被害は甚大であった。それを機に反戦運動が高まり、また、忘れられていた太平洋戦争についても事実の発覚が相次いだ。そして、重い腰を上げた政府は内閣に「語り部庁」を新設。過去を語り継ぐ決意をしたのであった。

　桜が舞い散る 4 月某日。私は念願の公務員になれた。今日は入省初日。スーツを正し、敷地に足を踏み込む。最高に気分が上がっている。第一希望である「語り部庁」は、両親・祖父母には盛大に止められたものの、給料も安定しているし、ずっと喋っていればいいなんて最高。面接で「メンタルは強いですか？」なんて聞かれたから、とんでもないブラックなのかと思っていたけれど配属先発表の時、「ヒロシマ部」と書かれていて、知らない文字の羅列だったから弱小部なのだろうと思った。今日はとりあえず、仕事の説明をされるらしいからスーツできたけれど、今後は私服でもいいらしい。とにかく、私の社会人生活の幕開けだ。

　「やあ。君が鳩田くんだね。よろしく。部長の、五輪だ」

いわゆるおじさんというような見た目で柔和な笑みを浮かべるこの人が私の上司になるらしい。なぜか嬉しそうに跳ねながら部内を案内している。そして……予想通り、人がとても少ない。やっぱり弱小部のようだ。

「あの、私はどんな仕事をすれば……？」

五輪部長は汗をしきりに拭いていたその手を止めて、影を落とした。

「君にはまず、“継承”か、事務担当か、どちらかを選んでもらう」

やけに重々しくつぶやいた五輪部長は私に強く、しかし自信のないような視線を送ってくる。

「“継承”にします」

前から決めていた私は迷わずそう告げると、五輪部長が近くの引き出しから書類を取り出した。

「“継承”は精神に負担をかけるから、必ず事後手当を出すことになっている。だからこの書類の記入が必要なのだが……」

私は手渡された書類の中身を大して読まずに署名と捺印を行った。五輪部長はおどけて「鳩田くん、君、詐欺にかからないよう注意したほうがいいんじゃないか？」と言うと、

「じゃあさっそく、今の語り部さんに連絡を取って、“継承”の日程を決めるよ。決まったら改めて連絡するから、それまではとりあえず事務仕事にあたってもらおうかな」

そこまで言うと息継ぎをして、一人の女性事務員さんを呼んで私を紹介した。どうやら日程が決まるまではこの人の下で働くらしい。軽い自己紹介をし終えたのを見届け、五輪部長は部長室の方へと歩き出した。

　翌日の朝。アラームで目を覚ますと、直後にスマホが着信を知らせた。相手は、五輪部長。早くも日程が決まったのか。

「もしもし」

『あ、鳩田くん。早起きだね。早速だけれど、来週には“継承”を行うことになったよ。ちょうど今の語り部さんがもうすぐ

定年でね。早めに“継承”して、ゆっくりしたいとのご希望だ。じゃあ、来週は基本的に“継承”で潰れてしまうから予定は入れないように』
とてつもない早口で言われたことを素早くメモしながら相槌を打つ。
「あ、」
『どうした？』
「持ち物って何かありますか？」
五輪部長が黙る。切れてしまったのかと呼びかけると、『ああ、すまない』という、間の抜けた声が聞こえてきた。
『なにか、不安定になったときに気持ちを落ち着けられるものを持ってくるといいかもしれない』
「気持ちを落ち着けられるもの……？」
『ああ。例えば、アロマとか、お気に入りの写真とか、お守りとか』
気持ちを、落ち着けられるもの……。会社には到底もっていかなさそうな物たちの名前に、少しだけ背筋を汗が伝った。今度は私が五輪部長に『おーい』と呼びかけられた。
「あ、ごめんなさい。承知しました」
『OK。それじゃあ、来週、よろしく』
大切な任務を任せたかのような「よろしく」が、少しだけ怖かった。
“継承”の日。普通に私服で庁舎に入った。バッグには、まだ子供のころ、肌身離さず持っていた人形を入れている。なんとなく流れていく冷や汗は、4 月には寒いくらい。少しだけ身震いをして、いつもの部内に入っていく。すると、そこには五輪部長と、初めて見るご婦人がいた。
「おお、鳩田くん。こちら、現語り部の鶴野牧恵君だ」
「鳩田優梨香さんですね。よろしくお願いします」
よろしくおねがいしますといいながらへこっと頭を下げてみる。
「それでは、早速、“継承”に入っていこうか」
重々しくつぶやいた五輪部長の隣で牧恵さんが顔を伏せる。二人の重い雰囲気が下の方から迫ってくる。なんとなく私も怖さが増した。理由のわからない鳥肌が体中を駆け巡る。
「じゃあ、鳩田くんはこの部屋に入って。どうしても具合が悪くなったら、この赤いボタンを押して」
そう言って案内された部屋は、VR ゴーグルやら扇風機やらが置かれた、室内型アトラクションのような部屋だった。
「じゃあ、ゴーグルをつけてみて。もう僕らは話しかけないから、あとはがんばって」
そう言って部屋が完全な閉鎖空間になった。少しだけ早くなった心拍を落ち着けて、ゴーグルをつける。そして目の前に広がったのは、人がたくさんいる、大通りだった。横は、何かの大きな建物で、中央の塔の天井がドームになっている。すぐそこでは壊した建物の残骸を子供たちが片付けている。ふと上を見ると、一基の飛行機が通り抜けた。何かを落とした……？
飛んでいた意識を取り戻すと、周りは文字通りの地獄絵図。一面が火の海で、私自身の体も焼けるように熱い。痛い。助けてという声も、喉が腫れて痛くて出せない。そもそも、いま周りには私を助ける余裕のある人などいない。ただ、少しだけ歩けそうだから歩き回ってみる。近くにあった川は人だらけで、見たことのない、赤に染まっていた。いたるところから叫びが聞こえる。近くにあった小学校のような建物は、半壊はしているものの、人が多く入っていっている。あそこでなら、助けてもらえるかもしれない。ふと手を見ると、皮膚が剥がれ落ちていた。束ねていたはずの髪の毛の感触もない。身にまとっているのは着ていたはずの洋服の端切れ。背中が、あの重い雰囲気の中駆け抜けた鳥肌の

比にならないほどの悲鳴を上げている。本能的に、死を感じている。力を振り絞って入った小学校の中で意識が途切れた。
　ゴーグルをもぎ取る。そこに広がったのは閉鎖空間だった。
「うっ……」
突然脳裏によみがえった光景と痛みに思わず口を覆う。横に目をスライドさせて、壁にある赤いボタンを視野に入れる。手を伸ばして、押そうとした瞬間、ドアが開いた。そこには、五輪部長と牧恵さんがいた。
「鳩田君！大丈夫か……」
駆け寄ってきた二人に安心して体の力を抜いたとたん、全身に激痛が走る。五輪部長と牧恵さんが私を持ち上げて、室外のソファに運ぶ。柔らかさにほっとして、少しずつ痛みが引いてきた。
「五輪部長……牧恵さん……」
「優梨香さん、大丈夫？」
ぽろぽろと落ちてクッションを濡らす涙のせいで牧恵さんのことがよく見えない。しゃくりあげてしまって、言葉もうまく話せない。
「こわ……かった……」
絞り出せたその言葉が、二人を悲しそうに俯かせた。
　「今日は、もう帰りなさい。一人で帰れる？」
気持ちが落ち着いたとき、五輪部長がそういった。
「……母に、連絡します」
静かにうなずくと、次は牧恵さんが近づいてきた。
「これ、私の連絡先。なんか、話したいことがあったらいつでも連絡して頂戴」
優しく語りかけてくれた牧恵さんが部室を出ていく。私はソファの下においてあるカバンからスマホを取り出し、母にメールを入れる。
〈体調悪くなっちゃったから語り部庁まで来てほしい〉
〈わかった〉
30 秒もせずに付いた既読と来た返信に驚きつつ、〈ありがとう〉と打ち、スタンプも添える。
〈夜ごはん、何食べたい？〉
〈今日はいいかな〉
そう打つと、少ししてから
〈わかった。一応おかゆ作っとくね〉
と返信が来た。
　少し眠ったようで、スマホが母とのメール画面を出したまま時計だけ 15 分進んでいた。すぐそこの部長室では部長が誰かと話している声が聞こえる。声のトーンが母っぽい。すぐに出てきた母は私のそばに来て「大丈夫？」と聞いてくれた。頷いて体を起こす。なんとなくまだ体が痛い。ただ帰らなければどうにもできなさそうなので母に荷物を持ってもらって小さく踏み出す。
「じゃあ、鳩田君、気を付けて」
優しい言葉に潤んだ瞳を隠しながら会釈をし、エレベーターに乗り込んだ。静かに母が背中をさすってくれた。
　すぐに自室に向かい、机の中から便箋を出す。部署で寝かされていた時間、車で走った数分。そこで私の気持ちは

決まった。私なんかに、あれは語れない。きっともっと志のある人が現れてくれるはず。私はしばらくバイトでもして、あんなこと忘れよう。あれは悪い夢だ。悪い夢。悪い……夢……。
　便箋を持ったままの手に、一粒の大粒涙が落ちた。それが便箋に垂れていく。少しずつ湿っている面積を増やしていく。それでも私は書かなくてはならない。「辞表」という文字を。新しい紙を出して、涙が垂れないように細心の注意を払いながら、ネットで調べたテンプレートを書き込んでいく。自分の名前まで書いたとき、スマホが鳴った。
〈優梨香さん、突然ごめんなさい。明日、お茶でも行かないかしら？とってもおいしいケーキのある喫茶店を知っているの。優梨香さんも気に入るんじゃないかしら。〉
一瞬、画面を見たまま固まってしまった。ただ、既読をつけているのに返信をしないのは失礼だと思い〈せっかくのお誘いですが、今回はお断りさせていただきます〉という文を書いて、句点を打とうとして手を止めた。この私の気持ちをわかってくれるかもしれない。話したい。話せば苦しさが取れて、どうにかできるかもしれない。そんな気持ちに乗せたままバックスペースを長押しし、〈ぜひ、行かせてください〉という文章に書き替えた。そして辞表の続きに着手した。
「助けて！」
自分の大声に驚いて身を起こす。じんわりと汗をかいている。そこに母が入ってきた。「大丈夫？」という言葉に少し安心して、「うん」と答える。「怖い夢でも見た？」と頭をなでながら少し揶揄う。その瞬間、見た夢が目の前にフラッシュバックする。目の前が光り、体が熱く痛み出す。怖くなって母に抱き着いた。体が震える。それをなだめるように母が体をさすりながら「大丈夫……大丈夫……」と言ってくれている。少しだけ落ち着いて、母から離れたとき、急に情けない感情が湧き上がってきた。
「語り部庁に入るって言った時、お母さんたちが言ってたこと、気にすればよかった。簡単じゃなかった。……ごめんなさい……」
何に謝っているのか、自分でもよくわからない。でもとにかく、謝らなければとだけ思っていた。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」
勝手に出てくる涙で視界が歪んでいく。今母がどんな顔しているのかすらわからない。だんだんうずくまるような姿勢で懺悔し続けた。
　平日スケジュールのままのスマホにたたき起こされる。丸まっていたはずの私はいつも通りベッドにちゃんと入っている。ただ、頬に涙の跡がくっきりついていて、夜の出来事はすべて現実なのだと思った。ただそれだけ思って、眠いままぼーっとしているとメールの着信音が鳴った。差出人は牧恵さん。
〈おはよう、優梨香さん。今どこかしら？どうしても見つけられないのだけれど……〉
メッセージに目を通して、スマホの上に目を動かす。すでにもう待ち合わせの時間になっていた。
〈ごめんなさい！寝坊してしまって……これから家を出ます！〉
牧恵さんに急いで送り、身支度をサッと終わらせる。母に出かけることを伝えると「体調、大丈夫？」と聞かれ、「うん」とだけ答えた。そのまま外に走り出して集合場所に急ぐ。
「あ、優梨香さん！」
無邪気にこっちに手を振る牧恵さんを見つけ、私も手を振る。
「牧恵さん！申し訳ないです……」
「大丈夫よ。さ、行きましょう」
　牧恵さんに連れられて着いた先は令和時代に流行っていたらしい様式のおしゃれな喫茶店だった。牧恵さんは入るとウェイターに「今日はお二人ですか？」と聞かれ、「奥の方の半個室にお願いできるかしら？」と答え、案内された。

「何がいいかしら。アレルギーとかはないわよね」
「大丈夫です。……ここ、おしゃれですね」
半個室を見回して、そのおしゃれさに見とれる。
「少し前に令和文化が再ブーム起こしたときにできたらしいの。私はその時からの常連」
少し誇らしげに話す牧恵さんをみて、申し訳なさが募る。言えない。
「とりあえず、コーヒーでも飲みましょうか。おいしいわよ、ここのコーヒー」
[当店のおすすめ]と書かれているコーヒーの名前を指さして牧恵さんがウェイターに注文するその隣にはおいしそうなケーキの写真が貼られている。。ウェイターが個室から出たとき、牧恵さんが少しだけ声のトーンを下げて「大丈夫?」と聞いてきた。
「牧恵さん、私、継承できません」
震える手を、爪の跡ができるくらい握りしめて伝える。
「私、無理だなって思ったんです。私みたいに軽い気持ちのやつが語り継いでいいものじゃない。あの体験をして思いました。それに、あの映像には続きがあったはずなのに、ゴーグルを外しました。……逃げました」
情けない私の告白にも牧恵さんは顔色を変えずに私に手を差し伸べた。震え続ける私の手を取り、牧恵さんの体温で包み込む。
「怖かったね」
優しく、母のように囁いて、緊張で冷たくなっていた手を温めてくれる。
「私もそう思ったし、今でも語り部の仕事のたびに怖くなる」
少しだけ、牧恵さんの手が震えだした。
「恐いわ」
外の喧騒に紛れて、口の動きでしか伝わらなかったけれど、牧恵さんの心が私の心を掴んでいく。
「でも、これは本当にあったことなのよ。あなたは、まだ生まれてなかったかもしれない。私がまだ、10 歳になるか、なったかくらいの時に、第三次世界大戦がはじまった」
社会科の授業でしか知らないそのワードに混乱する。確か、「日本は過去には囚われない」とかいうキャッチフレーズがあった、24世紀最大の戦争。
「すぐに疎開したし、私自身に大きな被害はなかったけれど、多くの町が燃えた。それは、まだ私も生まれていないずっと前に、政府が過去の負の遺産の全面的な撤廃を決めて、戦争の悲惨さ、恐ろしさを忘れたから。忘れないように、もう二度と同じ過ちを繰り返さないために、語り部庁ができて、私たちは働いている」
少しずつ震えだす声で諭すように話す。でも私は少し実感がわかなくて、何も言えなかった。そして牧恵さんが手を握る力を強めた。まっすぐに目を見つめられて、心を掴まれて離れない。
「……実感がないと、難しいわよね。でも、すこしでも、あの映像を見て苦しいと思えたなら、率直に、子供たちに向けて語ってほしい」
そこまで牧恵さんが話して一息ついたとき、ウェイターがコーヒーを運んできた。軽く会釈をして、また二人きりの空間に戻る。まだ牧恵さんに握られていた感触が残っている。
「あの映像は、被害を生き延びた、とある人が書いた手記に資料館などに保管されていた事実を加えて作られたものだというのは知っているかしら?」
唐突に牧恵さんから聞かれて、すぐに「はい」と言えなかった。きっとあの時書いた誓約書みたいなものに書いてあっ

たのだろうが、なにせほぼ読んでいない。ただ……あの状況にいた人たちは逃げられない。その状況を語り継いでいてくれた。私が感じた、疑似体験の苦しみの、何十倍もの苦しみを感じていたはず。それなのに、私は……。
「……情け、ないです」
絞り出せたその言葉が、牧恵さんに果たして届いたのかわからない。
「“継承”は必要だし、そうしてきた方々は本当にすごいと思うんです。でも、私には、あれを語れるほどの勇気がないんです……」
息が声帯をかすめただけのような声。
「こんな情けない私を変えたいんです。どうすればいいと思いますか……？」
牧恵さんは情けなく助けを乞うような目で見つめる私に向かって、再度手を差し伸べてくれた。
「語られることで、その子供たちにも少しは苦しさが伝わる。そうすると、戦争に対してマイナスに思える。そうやって、平和のお手伝いをして、世界を守る一歩になれるのは、すてきなことだと思うの。私はそうやって、仕事を続けてきたわ」
冷たかった手が、牧恵さんの温度でどんどん暖まっていく。昨日からずっと涙でぼやけていた視界が少しずつ晴れて、牧恵さんの輪郭が形を持っていく。ずっと、昨日から、この仕事は責任を持って、暗い気持ちのまま過ごすべきなんじゃないかとばかり思っていた。でも、さっきから私の心を掴んで離さなかった牧恵さんの心が、「そうじゃないよ」とずっと語りかけてくれている。平和のお手伝い。そう考えると、この仕事に誇りを持っていけるような気がした。
「牧恵さん」
しっかりと、声帯を震わせて。
「ありがとうございます」
深くお辞儀をして顔を上げると、牧恵さんも泣いていた。お互いの顔を見て笑い合ったときに運ばれてきたケーキは写真よりもずっと輝いていて、美味しかった。
　スマホと共に目を覚まし、着替えて、ヘアセットをして、メイクをして、ご飯を食べる。母に渾身の笑顔で「行ってきます」と言い、微笑みながら「行ってらっしゃい」と言われる。歩いて最寄り駅まで行き、霞ヶ関駅で降りて歩く。敷地の目の前にやってきて、小さく息を吐いてから服を正し、頬を一叩き。大きく足を踏み出して、敷地に入った。
　エレベーターから降りてすぐにある部長室のドアをノックする。
「鳩田君、大丈夫かい？」
「お陰様で。早速本題なのですが」
一気に息を吸い込む。
「“継承”、やります」
五輪部長の目をしっかり見つめて、はっきりという。
「覚悟、したということでいいんだね？」
恐る恐る聞かれる。
「はい。平和のお手伝い、させてください」
五輪部長の口角がフッと上がる。
「鶴野君と会ってたんだね？」
思わず驚きが顔に出る。
「やっぱり。彼女もね、やめたがっていた時期があるんだよ」

初めて会った時のような柔らかい笑顔で、思い出すように天井を仰ぐ。
「きっとその日、僕に辞意を伝えに来たと思う。そしたらその時の語り部さんと遭遇して。少しだけ話して、僕のところに来たら辞表を破り捨てた。そして、『平和のお手伝い、頑張ります』って言ったんだ」
牧恵さんも同じように先代に勇気づけられて、ここまで頑張ったんだなと思うと、昨日の言葉の重みが本当によくわかった。
「ありがとう。決意してくれて」
温かい言葉に頷き、あの部屋に入る。少しだけ怖くなって、手先が冷たくなり始めた。だけど、昨日の牧恵さんの手を思い出す。ふんわりと体が包まれたような感覚になる。深呼吸をして、ゴーグルをつけた。
　ゴーグルを外す。部屋の外に出て、スマホを確認する。部屋に入ってから1週間が経っていた。出てきた私を見て、五輪部長が「お疲れ様」と言いながらコーヒーを手渡す。見てきた光景が、いまだに頭の中でループしている。手に持ったままのコーヒーを見つめていると五輪部長が「大丈夫かい？」と聞いてきた。「……はい」と答えると、五輪部長は手帳を開いて、「早速だけど、今後の講話スケジュールについて話しても大丈夫かな？」と話し出す。私も手帳を開いて、五輪部長の話を聞いた。
　一通り確認し、コーヒーを口に運ぶ。すると、五輪部長が「本当に、ありがとう」と唐突に言った。意味が分からず返事できていないでいると、五輪部長は苦笑いしながら話始めた。
「いや、この業界さ、やめていく人が本当に多くてねー……常日頃からの人手不足。だからこんなに閑散としているんだけれど。だから、やめそうになっても踏ん張ってくれた鶴野君や君には頭が上がらないよ……」
頭をかきながら、寂しそうに、悲しそうに五輪部長が言う。きっと、みんな私みたいにここに入って、私みたいにやめていくのだろう。もしかしたら意思あって入ってくる人もいるかもしれないが、続けていくには相当の胆力が必要なことは身に染みてわかった。でも、
「途絶えさせてはいけない。ですよね」
気づいたら口をついていた。二度と惨事を繰り返さない。その思いが途絶えてしまう。軽い気持ちで入った人のことも、辞めてしまいたくなる人のことも、私ならきっと分かる。
「そうだね。鳩田君、本当にありがとう」
どうにかして、“継承”したい。どうにかして、その方法を探りたい。私ならきっと、できる。